

(5) 中学校・高校グループ（課外活動グループ）：  
リクレーション活動とソーシャル・スキル活動の統合をめざした活動の工夫

1) 療育のねらい

本グループは、中学校・高校グループの子どもたちが、スタッフとともにリクレーション活動をより主体的に計画し、活動することをねらいとしている。リクレーション活動とは、活動場所を大学外へと広げ、日常とは離れて仲間とともに“特別な経験”をすることである。たとえば、休日に観光地を訪れることや映画鑑賞、カラオケに行くことなどがある。これによって、新鮮な刺激に触れ、新たな発見をすることや日々の生活に向けてエネルギーを蓄えることを目指している。ソーシャル・スキル活動とは、①自分の内面と向き合う（例：「～したい」と思うことを計画する など）②仲間とのコミュニケーションをとる（例：計画した内容を他者と協同して実行する など）③社会のルールやマナーに沿って課題を解決する（例：公共交通機関を使用する、金銭面のやりとりを行う など）という3点を指す。本活動では、子どもたちのリクレーション活動とソーシャル・スキル活動が豊かになるように3つの目標を立てている。

1つめは「子どもたち」が活動を計画し、実行することである。主体性・当事者性を意識し、保護者の見守りの中で、子どもとスタッフが直接やりとりしながら活動を計画している。（手紙のやりとり、中学生・高校生グループでの活動内での話し合いなど）また、手紙の中には、1日のスケジュールを考えるなどの項目を用意し、1人1人が1つの企画を「自分が考えた」と意識できるよう工夫している。現在、活動全体を計画してもらうことはまだまだ難しいが、本グループの活動計画に自分たちは「参加しているんだ」という意識をもってもらうようにしている。

2つめは「活動範囲を広げ、『楽しい』と思えるものを“みんなで”共有する」ことである。子どもたちによっては、活動の範囲や興味が限定されていることが見られる。また、“みんなで”することの楽しさを経験しにくい様子もある。そこで、興味の範囲が広がるようにスタッフからアプローチしたり、好きなものを“みんなで”共有することで、場を共有することの楽しさを経験し、“思い出”をたくさん作っていくことを目指す。

3つめは「保護者から離れて、自信につながる経験をする」ことである。家族と離れて行動し、普段のリクレーション活動では行かないところに行ったり、金銭のやりとりや公共交通機関、施設の使用等を“1人で”あるいは“子どもたちやスタッフ”と協力しながら行えるよう工夫している。そして、「できた」と成功体験をしたり、失敗しても「なんとかなる」「助けを求められる」などの幅を持たせながら、子どもたちの自信へとつなげられるようにしている。

このように、子どもたちが主体的に行動し、リクレーション活動を仲間と協同して活動するなかで、楽しみながら、ソーシャル・スキルにもつながる経験を積み重ねる活動を目標としている。

## 2) 参加児

参加児は中学校・高校グループに所属している子どもたちが対象である（(1)参照）。活動への参加は、子どもたちの予定によって異なり、今年度は、全員で6名の子どもたちが参加した。

## 3) 期間

2014年3月から活動を開始し、2015年7月までに合計4回の活動を行った。

## 4) 手続き

(1)「企画会議」を行い、活動日や活動内容の予測を立てる。活動内容の予測は、事前に子どもたちの興味に合わせたものや保護者からのニーズを把握して、検討する。

(2)「子どもたちとの企画会議」を行う。子どもたちと直接やりとりしながら、行きたい場所やしたいこと、活動日程の大まかな調整など互いに話し合い、活動内容の大枠を決定する。また、手紙を発送することを伝え、より詳細に活動を企画してほしいことなどを伝える。同時に、保護者への活動内容などの説明や費用、ニーズの確認を行う。

(3)「手紙の発送」を行う。手紙とアンケートの目的は、子どもたちが活動を主体的にとらえ、活動の内容や日程などを自分で決めるためである。そこで、活動内容の希望を選択したり、具体的なアイデア（1日の活動の流れ、持ちものなど）を記入したり、活動日の候補日の中から参加できる日を選んでもらう。

(4)「活動内容の決定」を行う。会議の前に手紙の返送をもとに下見を行い、活動内容の質や安全性を確認する。これらの情報もとに、会議にて、活動日や活動内容を確定する。そして、活動のねらいや子どもたち・保護者のニーズを共有しながら、当日の流れなどの確認やスタッフの役割を決定する。会議での決定をもとに、しおりを作成する。

(5)「子どもたちとの活動内容の確認」を行う。(4)にて作成したしおりをもとに、子どもたちと活動の内容や予定を共有する。しおりには、事前に調べておいてほしい内容や計画しておいてほしいことなどの項目（昼食のメニュー、家族へのお土産、買いたいものなど）が用意されている。これらを通して、活動へのイメージを膨らませる。また、保護者への最終確認を行う。

(6)「活動の実施」である。活動は①集合②メインプログラム③振り返り④解散の流れで実施される。当日は先にスタッフが集合し、打ち合わせをした後、子どもたちと合流する。活動中は、子どもたち1人1人に合わせて、対応する。活動後に、子どもたちとの振り返りの時間を設け感想や次回の希望などを聞いた。子どもたちと別れた後に、スタッフのみで子どもたちの姿や反省などを共有し、次回につなげるようにした。

(7)「ふりかえり」を行い、活動に参加できなかったスタッフとも振り返りをし、

次回の活動内容を相談する。

## 5) 活動の流れ・内容

①	2014年5月	マンガ図書館で読書
②	10月	観光地で食べ歩きとトロッコ列車
③	2015年4月	繁華街で買い物とカラオケ
④	7月	ショッピングセンターで買い物と映画鑑賞

### ①「マンガ図書館で読書」(2014年5月)

普段、活動を行っている大学に全員が集合し、バスを使ってマンガ図書館に行った。マンガ図書館では、手帳を利用しながら自分でチケットを購入して、入館し、好きなマンガや絵本を選んで読みながら過ごした。昼食は、マンガ図書館内にあるカフェで、1人1人が券売機を使って購入し、それぞれの感想を話し合った。

**【発案者】** スタッフ (初回のため)

#### **【目標】**

- ・保護者から離れて、初めての課外活動を経験する
- ・バスを使って目的地まで行ったり、食券を自分で購入する
- ・絵本やマンガを選んで、みんなで楽しむ

### ②「観光地で食べ歩きとトロッコ列車」(2014年10月)

電車を使って観光地まで行き、公園でみんなでお昼ごはんを食べた。昼食後、商店街をぶらぶら散策し、食べ歩きや家族への土産を買った。最後にはトロッコ列車に乗って、ディーゼル機関車を漫喫した。

**【発案者】** 参加児 B, C

#### **【目標】**

- ・大学以外の場所に集合する
- ・お金を計算して、食べ歩きを行ったり、おみやげを買う
- ・しおりに書いた地図を見て目的地まで行く
- ・みんなで“トロッコ列車”を楽しむ

### ③「繁華街で買い物とカラオケ」(2015年4月)

事前に買いたいものを計画し、繁華街にあるショッピングセンターで購入する。その後、カラオケ店に行き、昼食を食べながら、カラオケをした。カラオケ後、それぞれ買ってきたものをみんなに紹介してもらった。

【発案者】参加児 D

#### 【目標】

- ・店員さんとコミュニケーションを取り、欲しいものを見つける
- ・昼食代やカラオケ代を考えながら、買い物を楽しむ
- ・カラオケを体験する

### ④「ショッピングセンターで買い物と映画鑑賞」(2015年7月)

駅に集合し、電車でイオンモールに行き、そこで、アニメーション映画を鑑賞した。その後、フードコートで1人ずつ昼食を購入し、みんなで食事をとった。昼食後、ショッピングをしたり、ゲームコーナーでゲームを楽しんだ。

【発案者】参加児 A, B, F

#### 【目標】

- ・同じ映画を楽しみ、感想を共有する
- ・ショッピングモールでの過ごし方を計画し、実行する

## 6) エピソードと考察

### ①振り返りについて

エピソード1 (2014年5月)

#### 「食事中の会話」

昼食中にマンガ図書館での話を子どもたちから聞こうと考えていたが、食事中は子どもたちが食べることに集中してしまうことや食後の満腹感、食後にもっと本を読みたいなどの思いから、会話がほとんどなかった。ただし、食事の内容に関する会話が見られていた。たとえば、サフランライスのおいさを嗅いで、不思議そうな表情をしている子どもに対して、「サフランだよ。」と声をかけたり、子どもが頼んだメニューに対して「いつも頼むの？好きなの？」と聞くと、「はい」と答えたり食事の感想を言い合ったりしていた。

エピソード2 (2014年5月)

「学校での振り返り」

大学に戻って、1人1人にしおりに感想を記入してもらった後、子どもたちに感想を発表してもらった。当初は子どもたちだけに感想を言ってもらおう予定だったが、急遽スタッフも感想を言うことになった。子どもたちのことがスタッフの感想の中に出てくると子どもたちはうれしそうな様子だった。

エピソード3 (2015年4月)

「カラオケでの振り返り」

ショッピングセンターで購入したものやカラオケ中に歌っている写真を見ながら、感想を述べあった。すると、子どもの中から、自然と司会を始めたり、会話をしながら振り返ることや“次回への期待”を話す姿が見られていた。

## 考察

エピソード1では、子どもたちにとって、「食事しながら考えて会話をする」ことはまだまだ難しいことが明らかになった。しかし、目の前の食事に対しては、「これはなんで黄色なんだろう？」と不思議に思ったことを共有したり、「おいしいね」「たのしいね」と感想を伝え合い、「食事中的会話」を楽しむことはできていた。「食事中的会話を楽しむ」ことは、大切なソーシャル・スキルの経験である。

エピソード2では、スタッフは子どもたちの付き添いという縦の関係ではなく、スタッフが子どもたちと同じ目線に立って、一緒に楽しむという横の関係にスタッフは努めた方がよいことが改めて明らかになったエピソードである。また、感想を記入した後、発言をするという形での振り返りでは、子どもたちも緊張して思うように発言しにくい姿や形式ばった内容になりがちになる。そのため、子どもたちの本心を読み取りにくく、縦の関係が強調されてしまう。一方で、何もない中で、イメージをして振り返ることの困難さもうかがえる。そのため、イメージを膨らませる工夫をしながら、自然に感想を言い合える環境や関係づくりが求められる。

エピソード3では、何を買ったかなどが視覚的に分かりやすい環境があった

ことや課外活動を積み重ね、活動への慣れなどから、発表形式ではなく、互いの感想に共感するなどのやりとりをしながら振り返ることができた。

このように「振り返り」は、ただ今日あった出来事を整理するという目的だけでなく、子どもたち同士やスタッフと会話することで子どもたちとスタッフの関係を深める。また、子どもたちが自然と司会を始めるなど「主人公」になれる場を作りだしたり、会話の中で「次回の活動への期待や内容を決めようとする」主体的な姿にもつながっている。このような関係や環境が積み重なっていくことで、今後の活動への子どもたち自身の安心感にもつながっていくと考えられる。

## ②集合について

エピソード1（2015年4月）

「事前に確認していたルートと異なった場合」

参加児Dは集合時間過ぎに、集合場所へ「すみませんー！」と言いながら走ってきた。

聞いていたバス停より1つ前のバス停で下車していたが、スタッフへ遅れることと下車した場所を間違ったことを連絡することは思いつかなかった様子だった。到着後、保護者には無事着いたとの連絡をしっかりとっていた。

エピソード2（2015年7月）

「集合時間を気にし過ぎる」

参加児Eは前回の活動で遅刻してしまったことを引きずっているのか、終始時間を気にしている様子で、買い物や映画に集中できていなかった。最後の集合時、集合時間を気にして、時間を気にするあまり「走ってもいいですか?」と言って店内を走ろうとする。10分前に到着し、時間になってもみんなが来ないので「捜しに行きましょうか」と言って、時間をすごく気にしていた。

## 考察

エピソード1のようなすれ違いが起きないように、なるべくなら子どもたち自身に交通手段を聞き、「スタッフと約束した」という意識を持てるような工

夫やうまく会えなかった時の対処方法を経験することも大切である。また、エピソード2のように「時間を気にして遊ぶ」ことは大切なことであるが、「時間を気にし過ぎる」ことは生き生きとした活動を妨げてしまう恐れがある。それぞれが時間に対する概念が異なることに気づき、互いに歩み寄りながら活動を楽しむことが求められる。

集合時間を決めた場合、その時間より早く集合することは当たり前のことであるが、実際、インフォーマルな場だと集合時間が曖昧になることもある。フォーマルな場とインフォーマルな場でどれくらいの時間に行ったらいいのか、遅れた場合はどうしたらいいのかということも子どもたちに気づいてもらい、それぞれの場面で自分で判断していくことが必要である。

### ③お金の計算

エピソード1（2015年7月）

「目に見える形だと分かる」

参加児Bは金銭でのやりとりや残金について、予測がつきにくく、上手くやりとりができない場合でも、本人は「なんとかなる」と言っており、最終的にお金がなくなったらどうするのかと聞くと、「お母さんに電話する」と言っていた。計算式を紙に書くと分かる様子だった。

エピソード2（2015年4月）

「お金をぴったり出そうとする」

参加児Eは買い物の際、スタッフが出口で待っていると、お金が「あと1円がない」と言って、カバンの中を探して慌てていた。スタッフが「1000円札あるよ？」と声を掛けると気が付き、1000円で支払いができた。

### 考察

参加児Bや参加児Eは金銭でのやりとりにおいてやや課題がある。参加児Bは、お金を暗算することは難しいが、目に見える形だと計算することができる。暗算が難しい子には、紙を挟んだボードやipodなどその子が普段の生活でも使えるような道具を使いながら、人を介してサポートを行い、やりとりを



積み重ねていくことが大切である。参加児 E は、最初は、購入額ちょうどの金額を出すことにややこだわっている様子だったが、スタッフの声掛けによってスムーズに商品を購入することができた。提示された金額に対してどのお金の種類を使って支払うことができるのか、臨機応変に対応することも重要なソーシャル・スキルである。各参加児の金銭面での課題はそれぞれであるが、保護者からのニーズも高く、今後も工夫をしながら活動の中に取り入れていくことが求められる。

#### ④興味・関心

エピソード 1 (2014 年 10 月)

「役割を与える」

参加児 B は興味の幅が狭く、趣味を広げるために、保護者より「写真を撮影することを楽しんでほしい」との要望があった。実際にカメラを持ってもらい、電車などを撮影するように声掛けをしたが、参加児 B の興味とは重ならず、「指示—受ける」というやりとりに偏り、主体的な行動に発展することはできなかった。一方で、参加児 B の興味の対象である「ジオラマ館」では、「～が見たい」という発言もあり、活動を楽しんでいる様子が見られた。

#### 考察

子どもたちにただ「役割を与えてこなしてもらう」というだけでなく、子どもたちの興味の幅が広がるように働きかける。しかし、それが子どもの負担や義務になってしまうことは避けなければならない。リクレーション活動にしてもソーシャル・スキル活動にしても子どもたちの興味に寄り添って活動を積み重ねたうえで、幅を広げてもらうことは重要な要素である。

#### ⑤モノの買い方

エピソード 1 (2014 年 10 月)

「家族へのお土産の購入」

参加児 A は事前に、保護者より和菓子を買ってきてほしいと頼まれ、しおりに目的地の記入もあり、自力で目的地にたどり着くことができていた。また、

和菓子にはいくつか種類があり、購入前に自ら携帯電話で保護者に連絡をとり、確認した後、購入していた。

#### エピソード2 (2015年4月)

##### 「店員に聞く」

参加児Bは目的の商品を探すときにスタッフから「店員さんに聞いてみたら？」と言うと「あ、そうですね」と言い、店員に「この商品どこにありますか？」と聞くと、店員が別の店員に聞いている間も静かに待ち、目的の商品まで辿りつけた。

#### エピソード3 (2015年4月)

##### 「商品の選択」

参加児Eは欲しい商品をあまり選ばず、目に入ってきたものを吟味することなく、そのまま選んでしまう様子だった。スタッフが色々提案してもあまり聞かず、「じゃあ、これで」という感じで即決して購入していた。

#### 考察

参加児Aは、地図を見て目的地まで行ったり、商品を見ながら「家族に対してどれがいいのか」を考えたとうえで、自主的に電話で確認する姿が見られていた。また、参加児Bはスタッフの提案をもとに、店員とコミュニケーションをとって、目的の商品まで辿りついていた。このように、人とコミュニケーションをとりながら、商品を探したり、選んだりすることは非常に大切であると考えられる。一方で、参加児B、Eは「家族のお土産」や自分の欲しい商品を買うために「じっくり選ぶ」ことが苦手な様子が見られた。相手のことを思ってお土産を考えたり、商品をじっくりと見比べたとうえで選択することを経験してほしいと思っている。それぞれ本当に欲しいものや興味のあるものであれば吟味できるのかなどよりていねいな工夫が求められる。

## ⑥活動への主体性

エピソード1（2015年4月）

「カラオケでの注文」

参加児Dは昼食時、スタッフから「みんなの注文を聞いて」とお願いすると、早く歌いたい気持ちを抑えて、みんなの注文を聞き、紙に書いていった。紙には、メニュー名を書き、横に正の字を書いた。電話での注文では、店員から「番号で注文してください」と言われたが慌てることなく、メニューを見ながら番号で注文していた。

## 総合考察

今までメニューの注文や会計はスタッフが全てやっていたが、少しずつ子どもたちにやってもらい、活動の進行やお金の会計ができるように働きかける必要がある。スタッフは活動の計画の際に、今日の活動の説明や振り返り、会計などの部分において、子どもたちの「役割」を想定しつつ、役割の分担や実施が自然発生的に行われるように工夫する必要があると考える。

## 7) 今後の課題

活動当初は、高校生の参加率の上昇や就学・就職のためのグループというコンセプトだったが、参加児の固定化や保護者からのニーズなどにより、大学外におけるより自由度の高いリクレーション活動がテーマになってきた。しかし、参加児の期待や参加できなかった子どもたちの関心は高く、現在では子どもたちにとって、本グループでの活動の存在が大きいものになってきている。また、活動後、「1人で〇〇（以前活動で言った場所）に行けるかも。」と発言するなど、自信へとつながる経験となっていることが推測できる。また、実際に自分で同じ場所へもう一度行ったり、「今度は〇〇に行こう」と子ども同士で連絡を取り合おうとするなど、子どもたちのリクレーション活動やソーシャル・スキル活動が豊かになってきている。

一方で、本活動は計画のほとんどをスタッフが行っており、様々な工夫をしているものの子どもたち自身で全てを計画することは難しい。そのため、子どもたち自身が「自分たちが企画した」という意識はまだまでもってもらいにく

い。そこで、手紙のやりとりの中で活動の流れを計画してもらい項目を作ったり、実際の活動のなかで会計や地図で案内するなどの役割を与えたりすることによって、少しずつ子どもたちの主体的な姿が見られる活動になってきている。今後も様々な工夫を行い、より主体的で当事者性の高い活動を実施することが求められる。また、本活動では、大学内での活動や家族との関わりでは見られない子どもたちの姿が見られる場面があり、子どもたちにとってだけでなく、スタッフや保護者にとっても、子どもたちの新たな一面を発見できる場所になっている。

今後は、大学内での活動と課外での活動の関係性を明確にしていくことが求められる。活動開始当初は、大学内での活動と課外での活動は、中学生・高校生グループの子どもたちと全く同じメンバーであるが、前述のコンセプトに基づき、完全に区別して行う予定であった。しかしながら、年に3回の活動を子どもたちにイメージしてもらい、話し合いなどによって計画したり、実施後にふりかえるためには、大学内での活動と協力することが必要不可欠となった。さらに、協力して行うことによって、子どもたちもより意欲的に課外での活動に参加することができた。今後は、より綿密な連携を行うことで、互いの活動への相乗効果を期待できる。例えば、大学内での活動で、お金の使い方を学んだあと、課外活動で実際にお金の支払いをしてもらうなど、学内での活動でイメージを得る経験をした上で、課外活動で実際に行ってみるという企画も可能になってくる。このように、大学内と課外での活動を連携させることで、より豊かなりクレーション活動とソーシャル・スキル活動の統合が可能になり、さらに発展していくと考えている。

(文責：津幡法胤・小林里帆)